2019 年 11 月 15 日
株式会社日本製鋼所
経営企画室 広報 G

20.3 期　中間決算説明会　質疑応答記録

１、日時：2019 年 11 月 15 日(金) 10:00-11:00
２、場所：野村コンファレンスプラザ日本橋(日本橋)
３、参加者：63 名

Q1:
上期の損益は当初予想に対して上振れている一方で、通期の損益は当初予想の数値を維持している理由を教えていただきたい。
A1:
変動費改善などによって上期の損益は上振れたものの、成形機の受注減少やフィルム・シート製造装置の受注遅れも発生している。その為、下期の操業減少等を考慮して通期の損益は当初予想を維持している。

Q2:
セパレータフィルム製造装置について、中国では上海エナジー社が 12 ラインの投資を行うとしているが、こちらの受注は上期にはなかったという理解で良いか。また、今後の受注の見通しについて教えていただきたい。
A2:
上海エナジー社からは、ある程度発注の約束を頂いているものの、実際の発注は延期が続いている。背景としては、中国の景気減速により、自動車生産・販売台数が減少していることがある。また、EV や PHV などの新エネルギー車への補助金が、2019 年 6 月に大幅に減額されたことも逆風となっている。
中国での 2019 年 1 月～9 月における新エネルギー車の生産台数は昨年度から横ばいであり、当社では年間でも昨年度と同等の 120 万台程度になるものと予想している。セパレータフィルムメーカーの間では淘汰が続き、上位メーカーも開発費負担から赤字になっているとのことであり、顧客の投資余力も潤沢とは言い難い。中国政府は拡大目標として 2020 年に 215 万台、2025 年に 500 万台という数値を掲げているが、実際には達成は困難であり、年間 30 万台程度の増加に留まるのではないかと予想している。30 万台の生産に必要なセパレータフィルム製造装置は 10-15 ラインであるため、当社の受注も 2017 年度のような巨額のものにはならず、緩やかな増加を辿っていくものと考えている。
尚、日本・韓国では国内への投資が堅調であり、この先は欧州市場への展開に舵を切っていくものと考えている。

Q3:
造粒機の好況は一時的とのことだったが、市場の状況について具体的に教えていただきたい。
A3:
造粒機の好況は 2018 年から続いている。通常は世界のポリオレフィン需要は年間約 1,000 万トン程度増加しており、造粒機では言えば 30 台ほどであるが、この需要の伸びが約 2 倍になっている。これを受け、造粒機の市場は約 600 億の規模になっており、当社はその 1/3 程度の受注シェアを確保している。
中国では、供給が需要の 40%程度にしか達しておらず、2023 年時点で約 2,000 万トンの不足になると見込まれている。この不足を賄うため同国では特に活発な投資が行われており、2021 年頃までは現在のような好況が続くと考えている。また、他のアジア地域でも中国への輸出用を中心に投資機運が活発になっている。

Q4:
今回見直した中期経営計画の数値の位置づけや達成の確度について教えていただきたい。
A4:
中計の見直し数値は現在の実力+αの水準で計画しており、大きく外れることはないと考えている。

以上